

伊勢・伊賀・志摩・近江・尾張・美濃大地震の図

この絵に記された地震は、幕末動乱期に起きた一連の地震のひとつで、伊賀上野地震とも呼ばれる。この地震が起きた嘉永7年（1854年）は大変な年で、6月15日に起きた伊賀上野地震を皮切りに、11月4日には東海地震、翌5日には南海地震が起き、これを機に2日に安政と改元される。しかしそれでも治まらず、安政2年（1855年）10月には安政江戸地震、安政5年（1858年）には飛越地震が起きる。こうした連発は、まさに地震活動期と呼ぶべきものであり、これから数十年間に我々が立ち向かわなければならぬ状況も同じなのかもしれない。

さて、この図に描かれた伊賀上野地震は、諸資料を総合すると次のようなものであったと考えられる。この地震は、嘉永7年6月15日（1854年7月9日）に、伊賀市付近の木津川断層が震源となって起きた内陸直下型地震であり、地震の規模はM7.2~7.5程度であった。宇佐美（1996）によれば、死者は1,308名（うち伊賀で625名）、負傷者1,664名程度である。3日前（6月12日）頃から前震が続き、前日には一時地震が減り、15日丑刻に本震が発生した。

木津川断層に沿う集落では家屋倒壊率は40%を超え、倒壊家屋数に対する死亡数も1.1人/軒と異常に高かった。「地震の記」（伝藤堂藩郡奉行入交省齊自筆）によれば、「東村には長さ百間余に、横幅は六拾間余より二拾五六間迄、深さは何れも貳間余、田面しづみて水たまり、池のごとくなりぬ」とあり、断層の南側が沈下したことを記録していると考えられる（萩原編著、1982）。

今村（1911）は、地震の約50年後に木津川断層を調査して、地震時に地表に現れたと推定される崖を「三田村役場裏手ノ段違」として写真にとどめた。また近年、産業技術総合研究所はトレンチ調査を行い、この断層が比較的最近活動していることから、伊賀上野地震の際に活動したとみても矛盾がないことを確認している（苅谷ほか、2000）。

ところで、この地震による被害はかなり広域に及んでいる。この絵にも、四日市や亀山付近で被

害が大きかったことが強調されている。さらに奈良や大和郡山付近でも被害が大きかった。丹後の宮津・信州の伊那・大垣・岡崎でもかなり揺れ、信州の妻籠付近でも「往還損じた」という。

木津川断層のみの活動でここまで広域的な被害が生じるだろうかという疑問も沸く。各地に残る歴史記録を比較すると、余震を含めて数回起きた地震の揺れの大きさが場所によって異なっていることから、震源が複数の断層であった可能性があるとされている（萩原編著、1982）。そう言えば、16世紀の地震活動期に中部地方で起きた天正地震（1586年）も、複数の断層が同時に活動した可能性が指摘されている。こうしたことも地震活動期には起こりえるのかもしれない。

「伊勢国は東海道四日市宿をはじめとして、東は尾張、西は近江国、北は美濃、南は伊賀志摩の国にいたるまで大地震」、「取わけ伊勢国四日市宿は震つよくして……家数九十軒余焼失す……橋々は落流れる」、「老若男女……慌てざらんものはなく……けが死亡の者凡五百人余……云云……」。絵の中には伊賀上野にも「この辺大損じ」とはあるが、説明文中には伊賀上野の被害の詳細は書かれず、東海道、伊勢道、中山道など、当時の街道に沿うものばかりである。当時の災害情報の伝わり方としても興味深い。

伊賀上野の被害を報じた他の記録には人びとの阿鼻叫喚も記され、伊賀上野には慰霊碑も多い。そんな地震から一息ついたであろう5か月後に、安政東海地震がこの地域に襲いかかり、さらに2~3千人とも言われる犠牲者を出してしまった。再びそんな悲劇を繰り返したくない。

（文献）：今村明恒（1911）：震災予防調査会会報、77
1-16 苅谷愛彦ほか（2000）：歴史地震、15 163-170 宇佐美龍夫（1996）：「新編 日本被害地震総覧」東京大学出版会、萩原尊礼編著（1982）：「古地震 歴史資料と活断層からさぐる」東京大学出版会

鈴木 康弘（名古屋大学環境学研究科地震火山・防災研究センター 教授）



伊勢・伊賀・志摩・近江・尾張・美濃大地震の図(鶴岡市郷土資料館所蔵)

